令和三年度　全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会

同中央審査　奨励賞　佳作

「すべての人に『いのちの水』を」

新居浜市立南中学校　三年　篠原（しのはら）　琴音（ことね）

「いのちの水。だけど命がけの水。」

この言葉を聞いたとき、はっとした。この言葉は以前放映されていたテレビＣＭのキャッチフレーズだ。おそらく発展途上国であろう地域に住む少女が、毎日毎日、大きなバケツを頭の上に乗せて水を汲みに行っている。当然、人間は水無しでは生きられない。その少女は自分や家族が生きていくための「いのちの水」を汲みに行っているのだ。しかし、危険な道のりを長時間かけて歩き、やっとの思いでたどり着いた先に少女が得られるのは、茶色く濁った汚い水。飲めば病気になって死んでしまうかもしれない。実際、汚れた水を飲んだことで、病気になったり亡くなったりする人が、世界中には大勢いる。まさに、口にするのも「命がけの水」なのだ。しかし、生きるためには飲むしかない。今日も少女は、水を汲みに出かける。何往復も、何往復も。

このＣＭで、これまで知らなかった世界の水事情の現状や、今まであまり意識していなかった問題を、深く突きつけられたように感じた。命がけで、生きるために水を得たり飲んだりしている人々が、同じ二十一世紀を生きるこの世界中に、まだたくさんいるのだ。その一方で、何不自由なく、衛生的な水を使える人々もいる。日本に住む私たちのように。この「水の格差」という問題が、私の心に重く突き刺さった。

改めて、自分の生活や日本の水環境を振り返ってみた。私が住んでいる日本では、まず水に困ることはほとんどない。蛇口が身の回りのあらゆる場所に設置され、屋内でも屋外でも簡単に水が使える。様々なろ過装置を通り、水質の安全性が確認された上で、私たちの

元に届く水は、透明で、そのまま飲んでも安全だ。次に、至る所にある日本の河川はどうだろう。もちろん全ての河川とは言わないが、比較的きれいな水が流れているところが多いように思う。生活排水や工業用水に含まれる有害物質を取り除き、無害な状態にして排水するための日本の技術は、その高いレベルから世界でも注目されている。公害や水質保全への意識の高さが、美しい河川を守っているのだろう。また、災害時に水が迅速に支給される仕組みも整っている。水道管の復旧作業は、最優先で素早く行われる。給水車なども適宜出動し、被災者の命を守っている。そして、世界中で新型コロナウイルスが大流行している今、日常生活の中で手洗いが習慣化しているが、私たちはきれいな水で手を洗い、衛生を保つことができるのだ。そして生きることができるのだ。これが、私の住む日本の水環境。

生まれた国が違うから、仕方のないこと？資源は水だけに限らないけれど、人間が生きていくためには欠かすことのできない大切な水。しかし、地球上で人間が使える水は、存在する水のわずか０・０一パーセントだそうだ。それほど貴重な水なのに、私と少女の環境はこれほどまでに違う。とても悲しくて、とても申し訳ないような気持ちでいっぱいだ。私は水が使えることを、当たり前のように思っていた。

では、今の私にできることは何だろう。まだ中学生の私には、少女に水を届けることはできない。しかし、将来少女たちのような環境で苦しんでいる地域で水の環境を整える活動をしている団体へ寄付をしたり、実際に活動に参加したりして、この問題に対する高い意識を持つことはできる。そして今すぐできることは、何より水を大切に使うこと。湯船のお湯を上手に使って体を洗う、歯を磨いたり顔を洗ったりする際に、水を出しっぱなしにしないなど、家族にも協力してもらいながら、節水を心がけていきたい。

いつか「命がけの水」が、全ての人々にとって「いのちの水」として行き渡る日が来ることを願い、水と向き合っていきたい。